

歴史と科学では、どこが決定的に違うか

・・・・・・神話と伝承に彩られた「先史時代」と、文字による記録に裏づけられた「歴史時代」・・・・・・。

神話・伝説は、民族の「祈りの結晶」である

・・・・・・一つ一つの伝説とは、とりもなおさず庶民の尊敬心や憧れが生みだすものであり、時の権力者に可能な部分は、「時代の要請」という太枠の骨格づくりや演出、解釈までで、具体的な内容を故意に創り出そうとしても、成功した例はほとんどない。そういう意味では、**歴史的記述とは“建て前”の世界であり、神話・伝説とは“本音の世界”であり、この二つが融合されたものが、本物の「歴史」**だと言えよう。・・・・・・だが、戦後の歴史学の不幸な点は、ことさらに、神話や伝説を軽視し、いわゆる偉人たちを視野の外に置いたことだと思う。神話や伝説は、古代の人々が「かく、ありたい」と願った憧れや、民族的記憶の投影であり、古代人の歴史体験の反映である・・・・・・

幻の年号「景初四年」の謎

・・・・・・たとえ三世紀から文字が伝来していたにせよ、歴史の記録に漢字が使われていたと考えるのは早計であろう。なぜなら、紙や竹片、木片に書いた文字は、歳月の流れの中で朽ち果ててしまいがち。金属や石といった素材に文字を書くといっても、実用性は少ないだろう。だから、『古事記』『日本書紀』が成立する直前の史料はいざ知らず、それよりも古い記録は、それまでの伝統どおり口伝で伝えられたと考えるのが、ごく自然である・・・・・・。

神話と考古学を結ぶ糸こそが重要

古代史の研究のもうひとつの柱は、言うまでもなく考古学である。地下に眠る古代人の生活の跡は、たしかにさまざまなことを現代のわれわれに教えてくれる。しかし、一つ一つの遺跡が、まず私たちの目を惹くのは、文化交流の研究などを別にすれば、歴史の大きな流れというより、ひじょうにミクロなものである。まず、もっとも大切な発見は、その場所に住んでいた人の、いわば自分史の記録である。農耕をしたり、食事をするために煮炊きしたりという、ひじょうにプライベートな部分を、弥生時代の遺跡などでは見ることができる。一人一人の人間の生活を追体験できるという点で、たいへんミクロな歴史の記録といえる。これに対して**神話は、民族の由来などを象徴的に説明**しているものであり、たいへんマクロな記録と言ってよい。その中には一人一人の生きかたも描かれてはいるが、それは民族全体の歴史の流れ、さらにはその民族に共通した記憶とは何かを説くための方法論の一環であると考えべきだろう。だから、**古代史を考えるというのは、生活遺跡などで発見されたミクロの部分と、神話に現われた民族性などのマクロの部分とをどうつなぎ合わせ、当時の日本を生き生きと再現し、物語るかということ**である。だから、ある意味では仮説の連続になることだって起こりうる。つまり、仮説というのは、考古学と神話というバラバラの端切れを、一枚の歴史という、大きな布を縫い合わせるための大切な糸だといえるのである。一つ一つの端切れを、どう組み合わせるかは、縫い手である歴史家それぞれによって異なってくる。また、考古学上の新発見が現われて、いままでの組み合わせでは適切でないと思われる場合、もう一度ほどき直すことから始めなければならない。つまり、そういう勇気を持ち合わせていることも、歴史家にとっては重要な資質だといえる。

登呂のゴザが教える「文明進化論」の幼稚性

さて、仮説という糸で歴史を縫い合わせるときに気を付けなければならないのは、偏見や先入観である・・・・・・。

最終のユーカラの語部かたりべが見せた驚異の記憶力

・・・・・・文字を持たない民族の記憶は、アイスに限らず、世界中、どこにおいても驚くほど正確である

る。たしかに、文字は民族の財産である。だが、やや逆説めくが、記憶を文字に依存するようになると、人間の記憶能力そのものが衰えてしまう。そしてその結果、記録をなくしたりすると、大あわてすることになる。しかし、記憶だけが財産だということになれば、その能力にさらに磨きかけられ、本人が亡くならないかぎり事実の伝承は紛失することもなく、脈々と後世に継承されることになる・・・・・・。

視点を変えると、日本海文化圏が見えてくる

・・・・・・中国大陸にとって、日本列島の窓口は、日本海側の海岸線である。中国から渡航して日本に渡ろうとする者は、若狭や新潟が最短距離の場所で、最初から大阪湾へ、瀬戸内海へ行こうとは、当然、考えない。そのため、日本海沿岸の文化を軽視するのはたいへん危険な考え方であると言わざるをえない。また、同じ日本海文化圏といっても、出雲ばかりに注目する見方もあるが、それにも賛



成しかねる。出雲の荒神谷遺跡で三五八本という大量の銅剣などが出土したために、突然、出雲が日本海文化の中心であるように評価されるようにたったが、私はむしろ、**出雲は大和文化圏の延長線上にある**と考えつづけている。たしかに、神話にも出雲政権が大和政権の対立政権であるように書かれている。だが、出雲は大和と同じ言語体系であり、豪族同士も血縁関係を持っている。また、古墳を見ても前方後円墳は出雲地方に集中して多いうえに、銅剣・銅鐸が大量に出ている。要するに、出雲は青銅器文化圏であって、この種の出土品がない日本海側のほかの地域と異なる厳然たる特徴を備えているのである。これに対して、越国こしのくに一帯は、古くから、粛慎しゅくしんすなわちツングース系の満州民族との文化的交渉や人間的交流の舞台になっていた。古代日本の、北方からの文化成立と民族構成の窓口的役割を果たしていたのだ。……平安初期までの歴史は、大和地方で編纂されたものである。大和朝廷といっても、近代の絶対王朝のような強烈な権力国家ではなく、「地方豪族の雄」くらいの存在だと考えておいたほうが、より無難である。したがって、大和やその周辺の出来事を中心に書かれるのが当然で、もし、当時の歴史が新潟県や富山県、あるいは福井県あたりで編纂されていれば、その内容は、まるで逆になっていたに違いない。……これまで語られてきた日本の歴史は大和中心の史観であり、これに対して、日本海史観なり越国こしのくに史観といった“ものの見方”が成立してもよいのではないだろうか。大和から見た地方史があれば、地方からみた大和史があってもよいはずである。ところで、越国の語源は「遠いところ」というものである。奈良や京都に住む人々にとっては、いまの福井県、石川県、富山県、新潟県、山形県はすべて「越こし」であった。のちにそれを分けて、越前、越中、越後にしたが、越前が大きすぎたので東半分をさらに加賀と能登に分けた。そして西半分が越前と若狭になった。だから北から順に言うと、越後・越中・能登・加賀・越前・若狭の六力国を合わせたものを本来、「越」と呼んでいた。そして、この「越」に共通しているのは海岸部に平野が少ないということである。しかも陥没海岸が多いため、断崖絶壁とか入江のない単調な砂丘しかできない。若狭だけはリアス式海岸のため、港が作れるが、「越」のほかの地方は良港に恵まれなかった。昔の新潟港は佐渡へ行く渡船場でしかなかったし、酒田や秋田も江戸時代に北前船と呼ばれる廻船が航行するまで、港らしい港はなかった。つまり港がなく、海岸平野が狭かったため、古代文化の中心とはなりにくかったのである。しかし、それだけに特異な文化が成長する傾向を持っていたのである。

なぜ、天孫降臨の舞台は日向だったのか

ところで、これまで説明してきたように、古代の北九州には、さまざまなテーマ、かあるが、これに反して南九州には、そういった要素がほとんどない。たとえば『魏志倭人伝』には、日本国内のいろいろな国の話が出てくるが、南九州は、その範囲に入っていない。また考古学的に見ても、かなり後世まで、南九州の文化水準は高いとはいえず、文献にも、ほとんど登場してこない。わずかに、奈良時代末期に、和気清麻呂が大隅（鹿児島県）に流されたという記事があるくらいである。これにしても、南九州にとって不名誉な話で、流刑地として選ばれたぐらいの不便な地と、当時はみなされていたわけである。だから『古事記』や『日本書紀』で、理想郷・高天原におられた神々が地上に降りるくだり、いわゆる天孫降臨の地に、日向（宮崎）の高千穂が選ばれたことについて疑問が持たれ、さまざまな解釈がなされてきた。4章でも触れるが、ここで少し「天孫降臨」の話をしておこう。『古事記』によれば、わが国は大国主命によって平定され、太古の混沌とした状態から国を治めるにふさわしい地上世界になったはずだが、今度は地上の神々が、荒々しく勝手な振舞いをする状態になってしまった。そこで、天照大神は直接統治することを決意する。まず最初に、使者を派遣し平定しようとしたが、これは失敗に終わる。その後の使者の働きで、地上の神からの国譲りが成立し、天照大神の孫、瓊瓊杵尊が高千穂の地に降り、日本の歴史が始まることになる。これが天孫降臨に至るまでのストーリーである。では、なぜ南九州の高千穂の地が選ばれたのか。誤解を恐れず、大胆に仮説を述べれば、南九州の地が文化・経済的に中央と比較して後進的だったからこそ、古代の人々は神々の降り立つ聖地をここに仮想して伝承するようになった、と考えてはどうだろう。また、高千穂が古くから、聖なる上地と考えられていたために、このような天孫降臨と結びつけられやすい背景があったのかもしれない。実は、天孫降臨の地に日向が選ばれたことに対する的を射た解釈は、神話のこの部分だけを見ていたのでは得られない。一部分だけを採りあげて、一生懸命、あれやこれやと推理してみても、それは「木を見て森を見ず」という結果にしかつながらない。

裁判沙汰になった本家・高千穂の争い

地上に降り立った神々の子孫は、しばらく日向の地にとどまる。しばらくとはいっても、神さまの話だから、彼らが日向に滞在した期間は一七九万二四七〇年間だったと『日本書紀』には記されている。これは、神が地上の世界に馴染むためのウォーミングアップに要する期間だと古代人が抽象的に考えた「時間の単位」だと解釈すれば、何ら問題はない。まさか、この記述を真に受けて議論の種にする人はいまい。まあ、たとえて言うなら、母胎にはぐくまれる日本民族の胎児期・嬰兒期の記憶のようなものであろう。そして、子どもが物心がつくようになると一人歩きを始めるように、日本民族も、より効果的な人間的営み、つまり生産活動（稲作）や防衛活動、さらには交通の便などを考慮に入れ、一段と有利な地への移動を開始しはじめる。それが、いわゆる「神武東征」神話だと考えてよい。だから、**神武天皇が大和へたどりつくまでのさまざまな苦難を示した神話は、その内容の真偽はさておき、日本で最も「安全」な地理的条件をそなえた場所を求め続けた「古代人の英知」を反映した重要なエピソードだといえる。**たとえば、現在の奈良県宇陀

郡で、そこに住む宇陀兄弟によって神武天皇は、からくり仕掛けの御殿に誘い込まれて、あわやだまし討ちに遭いそうになり、危機一髪で助かったという話にしても忍坂おさか（奈良県桜井市）で、土蜘蛛という先住民の軍団の道路封鎖に苦しめられた話にしても、国を営み、治めるにあたって、どこが最も適した土地か、その発見を暗中模索した過程の反映だと読み取れる。また、もし神武天皇の出発点が日向・高千穂でなかったら、神武東征の話はどうなっていたらどうか。たとえば、もっと大和に近い地から出発したとすれば、神武天皇の苦難はあれほどのものとはならず、安全や食料を求めてさまよったであろう古代人の苦労の実感とは大きくかけ離れ、ストーリー性を失った真実味のない伝承に終わり、神話にまで昇華しなかったに達しない。まさに、日向が天孫降臨の舞台に選ばれたのは、神話のストーリー展開からしても、必然的だったとさえいえる。苦難の旅立ちは大和から遠ければ遠いほどよかつたはずだ。また、日向が天涯の地であっただけでなく、多少は文化があり、情報の伝達も僅かながらあったからこそ、東征の動機も生まれるのである。日向から南の土地は、火山灰が積もってできた、いわゆるシラス地帯であり、農業生産には不向きな土地である。また、大雨が降ると山津波が起きることもあり、生活するにはまことに不都合が多い。『逆・日本史剛』でも触れたが、このような地理的ハンディキャップゆえに、近代になって薩摩藩は倒幕の主力に立ち、また、まさしくそのハンディキャップゆえに、倒幕を果たせたのである。神話を生みだした古代の人々も、こういった認識が当然あったにちがいない。このように、神話全体の流れが何を語り、何のために語られたかを考えずに、高千穂や高天原がどこに実存したか、といったことを議論するのは、ほとんど無意味な行為である。そのような末節にとらわれた議論を、私は若い頃から自戒してきた。戦前には、高千穂がどこにあったかで、宮崎県と鹿児島県の人たちが争い、現在の最高裁判所にあたる大審院にまで持ちこまれたことかあった。天孫降臨の舞台である「えびの高原」は宮崎・鹿児島両県にまたがっている。結局、この時は、大審院が「判断する必要なし」として、訴訟を取り下げたが、このような争いは、神代史の存在意義を無視したナソセンスな議論だと、私は考える。神話を通じて古代人が伝えようとしたことの「太枠」と「その骨子」を、まず感じ取るセンスが大切なのであり、それが古代史を読むうえで何よりも重要なのである。

「久米族」は東南アジアからの渡来民だった

『古事記』のなかに、神武天皇が妃を探すときの使者に大久米命おおくめのみことという人が出てくる。大久米命は久米族の祖先で、目の周りに入墨があり、利目とめである、と書かれている。利目とは鋭い目のことで、視力が並外れていることを表わす。ものを探すのに適しているので、神武天皇の皇后さまを発見した、というわけである。この説話に出てくるように、大久米命は、近視ばかりの現代人とちがって、みんなが視力がよかつた当時でさえ、人並み外れた視力を備えていたために、南九州から神武天皇に従って大和入りをしたのであろう。そして、大久米命の同族、久米族が持ってきたものが、「くめ」すなわち「こめ」であつたと伝えられている。この話は、久米族の出身が南九州ではなく、東南アジアであつたことを伝えているのではなからうか。つまり、米の原種を持って、東南アジアから人間がやってきたことの象徴と考えられるのである。南九州の人々は古くから、東南アジア、あるいは揚子江沿岸か、そのどちらかは断定できないが、そのあたりと交流があつたのではないだろうか。米を、あるいは装身具や風俗を、海外から採り入れていたにちがいない。数少ない南九州の古代の墓から、宝貝を削り、中国独自の竜の紋章をつけた装身具が、ずいぶん発見されている。これを見ても、南九州の人たちが、直接、中国と交易して、中国文化の一端を身につけ、誇りにしていたことがわかる。

「祀まろわぬ者」たちの悲劇

……たとえば、「祀ろわぬ者」という表現が古典に出てくる。これは大和朝廷が武力制圧を試みる時の大義名分に使った言葉で、大和朝廷と同じ神さまを祀らない者、同一信仰を信じない者を指している。だから、大和朝廷や、それに帰属した人々と信仰を一つにしない者は、すべて「祀ろわぬ者」の大義名分の下に、征服されてしまった。要するに、大和政権による日本統一の歴史は、「神話」の時代に日本中のいたるところで「地方文化の花」を咲かせた“八百万やおよぶの神”を駆逐してしく過程だったのである。原始社会では風俗・習慣の違いに応じて、それぞれ異なる神さまを信仰しており、それが熊襲、隼人であり、土蜘蛛や井光いひか、そして蝦夷えみしなどと呼ばれた土着の先住民であつた。土着民を征服するのに、これほど、うまい口実はない。……水田農耕とともに拡張した大和政権の勢力は、古代大の定住化をすすめて、土地に人を縛りつけた。水田は大和朝廷の財源であり、農耕民は「公民おほみたから」となつて、意識の均一化を生んだ。稲を作り、米の租税を納めなす非農耕民は、朝廷には迷惑な存在である。だから、古代において異族視された九州の諸国は、大和勢力の浸透とともに、しだいに水田耕作を始めて、「公民」に変化していく。ところが、寒冷地で稲作に適さない東北地方では、なかなか水田農耕が発達しなかつたため、そこに住む蝦夷はいつまでも国宥の文化を固持していたので、かなり後世まで異族視され続けた。

歴史が教える、日本人の弱点

総体として言えば、同一民族による均一な文化を待った民族が日本の歴史を動かしてきた。そして、それが長所として発揮されることも、たしかに多かつた。だが、今見たように、「東征」の神話、さらには平安期の坂上田村麻呂の時代において、すでにそのデメリット（短所）は、さまざまな形で現われ、その伝統は、現在にも深く受け継がれているのである。時あたかも、国際化社会の中心に日本が躍り出た時代である。また、国内的には成熟社会と言われ、これは多

くの異なった価値観・美意識と仲よく共存する時代のことである。こういう時代にあつて、象徴的に言えば「祀ろわぬ者」を、ただ単に風俗・風貌・習慣・感性などが違うからといって、無闇に排斥したり無視したりすることは、まさに百害あつて一利ない行為である。だが、こういった反応は、日本人にとって「第二の天性」とでも言うべきもので、ともすると無意識のうちに発揮されてしまいかねない。歴史を知る効用というのは、なにも民族の長所をことさらに喧伝するところにはない。それより、その長所と同居している短所を熟知し、それが現実生活に、どのような軋轢や桎梏を生むかを直視する勇気を与えることのほうが、はるかに重要なのである。

伊勢神宮は東国遠征の軍事的拠点だった

**伊勢神宮は皇室の祖先神である天照大神を祀った神宮であつて、崇神天皇のとき大和の笠縫邑かきぬいのやまにあつたものを、**近江、山城、丹波のあたりを点々と回つて、方々でお祀りし、各地で信者を集めながら三〇年を過ごし、その後、伊勢国へ入り、最後に、**今の伊勢神宮のある場所（三重県伊勢市）に鎮座するようになった**と伝えられている。伊勢の地は、地理的に神話の舞台から外れた場所にあるように思えるが、私は、あの場所に重要な秘密が隠されていると思う。紀伊半島の真ん中に大峰山や大台ヶ原があつて、そこから西へ流れる紀ノ川と、東へ流れる宮川があり、宮川の河口が伊勢神宮の所在地になっている。だから、大和地方から伊勢に行こうとすると、宮川伝いに下れば、自然に到着する場所にある。また、伊勢から船に乗ると、簡単に三河国（愛知県東部）へ行くこともできる。このような、地理上の有利さは、中世に、南北朝争乱の際、吉野の南朝が宮川沿いのルートを必死になって確保しようとしたことにも現われる。このルートこそ、西日本から東日本に出るには、もっとも効率のよい通路で、日本統一のキイとなる戦略通路だった。三河国と伊勢国の関係は濃密で、お伊勢詣りをする時、尾張の人は、今の熱田神宮から七里の波しを舟で桑名に渡り、それから伊勢街道を歩いたものであるが、三河の人だけは舟で宮川河口へ出るので、歩かなくても容易に参詣できた。そういう意味から、伊勢の地（紀伊半島）は畿内から東日本へ出る門戸であり、航海の出口だったと言える。だから、あそこに神様を持っていけば、東日本と近畿・大和の中間点として機能し、大和朝廷の安全性も高まる。これが伊勢神宮が、今の場所に定まった真相であろう。日本武尊の説話では、熊襲征伐に西に向かうときも、次の東国遠征に向かうときも日本武尊は、まず、伊勢神宮へ赴いている。伊勢から熱田に寄つて関東へ行くという日本武尊の足跡は、倭姫命やまとひめのみことに会つたり、宮詣りをするだけでなく、東国に向かうルートがあつたことを示している。当時の大和朝廷にとって、出雲・吉備などは契約結婚のような形で結びつきができており、西は安全性が高かつた。だが、東国は農耕文化の普及が遅く、すべて、これ敵地とみられていたため、戦略的見地から言つても、あの場所に伊勢神宮を鎮座させたのであろう。伊勢神宮の神さまは、言わずと知れた天照大神であり、農業生産神である。今でも伊雑宮いざわのみやという別宮は田植え祭りを行ない、そこで神さまの一年分の米を生産している。徹底した農業信仰であつて、その農業開拓が伊勢神宮を起点にして東へ拡がっていった。

神道の源流は縄文時代に存在した

では、その縄文時代の人々の信仰とはいかなるものであつたろうか。その信仰を示す遺跡として注目されるのが、東日本に分布するストーンサークルの一種に当たる巨石記念物である。大きな石を中央に立て、その周囲に石を円形に並べたものが、それである。古代の人々は、この石を信仰の対象として拝んだ。つまり、石には神様が宿ると考えたのであろう。こういう信仰を巨石崇拜とも呼ぶが、のちになって形を整える日本の古代神道にも、この巨石崇拜の要素がある。磐座いむくら、磐境いむさかと呼ばれる石を拝む信仰は、古代の神道の姿のひとつだった。今の伊勢神宮にも、磐座がちゃんと存在し、神主は祭りを行なう前に、この磐座の前でおはらいをする。また、日本でもっとも古い神社のひとつである奈良の大神神社も、山の上に磐座が祀られている。石に神が宿るという考え方は、まさにシャーマニズム的発想そのものであるが、これが農耕中心の社会の中で農業神に集約発展し、今日に見るような神道となつていったのである。これまで、縄文時代の信仰と、神道に代表される日本人の民族的信仰の間には断絶があるとか、無関係だと主張する学者も多い。しかし、縄文土器の製法に日本人の技術的発想の姿がすでに現われていたことでも分かるように、縄文時代とその後の時代の精神が断絶しているとは、とても即断できない。磐座に見られるようなシャーマニズムの基本的な性格は、縄文の時代から続いていると考えるべきである。もちろん、縄文時代の信仰のすべてが、後代に残つたとまでは言えない。しかし、その基本となる部分は縄文時代からすでに存在し、それが日本人の本質を形成していったのでないか。そして、その精神史が包蔵されているのは、やはり神話なのである。ここで、あらためて指摘するまでもなく、『記紀』は八世紀になって成立した書物であり、その内容は農耕社会の仕組みを色濃く反映している。しかしその中には、農耕社会とは独立して、日本人が古くから抱いてきた信仰や思想の根本となるものが、数多く残されているのである。つまり、神話の検証にこそ、日本人とは何かという設問への、的確な答えが隠されているのである。

天皇が自信をつけるための書『古事記』

日本の神話を考える大きな出発点となるのは、いうまでもないが『古事記』（七一二年成立）と『日本書紀』（七二〇年成立）である。奈良時代のごく初期にあたる時期である。どちらも、神話を中心に、天皇家の由来を明示する意図で編纂されたものだが、それぞれに読者対象が違つたため、二種の歴史書が編まれたのである。つまり、『古事記』は**天皇自身が読み、天皇家の正統性に自信を持つために作られ、『日本書紀』は、外国（中国・朝鮮）と日本のインテリ層に**



読ませ、内外に大和朝廷の尊厳を説くために作られたのである。これは、それぞれの文体にも、その差が表われている。

『日本書紀』は漢文化人でも抵抗なく読めるようになってきている。これに対して『古事記』は、表音文字で、日本語＝大和言葉の発音をそのまま採用している。たとえば、日本の国土が創られた時の『古事記』の記述は、“国土がクラゲのように漂っていた”というもののだが、その表現は『久羅下那州多陀用幣流之時くらげなすただよへるとき』という形である。この部分を中国の人が読んでも、何のことも理解できるわけではない。大和言葉の発音と意味を知らないとい読めない文章である。(もちろん、全編を万葉仮名にすると読みづらいため、一部漢文も併用されてはいるが……)。しかし、両者とも共通しているのは、その記述の立脚点で、それは大和朝廷、ひいては天皇家を賛美し、その正統性を納得させる点にある。

古代の“ヒストリー”は“ストーリー”である

私は、かねてから「古代史、とくに先史時代にあたる歴史の部分は、ヒストリー（歴史）というよりストーリー（物語）とならざるを得ない場合、が多い」と考えてきた。古代史を研究するうえでは、文字として残されている資料が少なく、どうしても遺跡や遺物を手がかりに「歴史の流れ」を合理的に想像していくしかない。しかも、遺物や遺跡は望んでも見つからない場合のほうが断然多く、かりに見つかったとしても、ほとんどは偶然の産物である。また、自然科学で用いるような、限られた数の事象から真理を導きだす帰納的方法も役に立たない場合が多い。いきおい、考えるすべての可能性を検討して、その中からもっとも合理的な仮定を取り出していくしかない。よかれ悪しかれ、古代史の研究家には固定概念に囚われない自由な想像力と、説得力を待ったストーリー・テラーの才能が不可欠な要素として要求されるのである。しかも、推理を働かせる場合には、歴史学者としての知識以外に、ありとあらゆる学問（人類学、民俗学をはじめとして、工学、気象学などまで）を動員して、より公平かつ客観的なストーリーを編み出さなければならない。また、もちろん、自分の立てた仮説や、それに基づくストーリーなどの反する実証的な新発見がなされた場合、自分の面子にこだわらず、どんどん修正していく勇氣も必要になる。一時期、日本の古代王朝は、北方騎馬民族による征服王朝だとする仮説が喧伝され、現在でもこの説を信じこんでいる人も多いようだが、私はこれに対し、多くの反証を挙げて反論したことがある。たとえば、騎馬民族というのは、洋の東西を問わず男女ともに必ずズボンをはいているものだが、古代日本にはズボンをはくような習慣はなかった。また、古墳を掘ってみると馬の鞍とか馬具の埴輪などが出土するため、これをもって騎馬民族征服説の根拠としている。だが、それならその前の時代、弥生や縄文期の遺跡から馬具や馬の骨が大量に出なければいけない。このような時代を画する大事件が一朝一夕に成るわけもなく、その痕跡は、必ず前の時代にも残るものなのだが、それを示す証拠の品が一向に出土しないのである。たしかに騎馬民族との接触はあったにちがいない、文化的・政治的な影響も受けたことだろう。しかし、騎馬民族征服説が言うように、「日本の古代貴族は全部騎馬民族」であるかのような主張は、どうしても成り立ちえないのである。事実、縄文期の日本列島には馬がおらず、古墳期になって中国人が朝鮮半島を経て、徐々にこの大型家畜を持ちこんだのである。だが、私の反論に、騎馬民族説を採る学者グループからの反応は、まるでなかった。困った挙句に無視することにしたのだろう。しかし、騎馬民族説を唱える代表的な歴史学者の一人が、私に次のような述懐をもらしたことがある。「樋口君の言うとおりの、あの説は行きすぎた。でも、あまり有名になりすぎて、今さら看板を下ろすわけにはいかなかったのだ」一度言ったことを引っ込めては自分の権威にキズがつくという、いかにも日本的な現実対応精神の発露だが、“過ちて改むるに憚ることなかれ”（『論語』学而がくじ第一）を持ち出すまでもなく、先述のとおり、仮説こそ古代史発展の原動力であり、それゆえにこそ間違いに気づけば、さらりと面子を捨てて自説を訂正する精神がなければ、歴史、とくに先史時代の研究はできないのである。

エピソード集だった神話の物語

さて、「古代史とは一種の“物語”である」という観点に立てば、『古事記』や『日本書紀』に登場する「神話」も、唯物史観の歴史家たちが言うような「時の権力が自己の正統性をでっち上げるために、事実をねじ曲げた創作物にすぎない」ということではなく、扱い方によっては、日本民族の本当の姿を窺い知る重要な“証拠物件”を含んだものなどいえる。あらためて指摘するまでもなく、『記紀』にあるような完成されたスタイル、つまり起承転結のメリハリの利いたストーリーが最初からあったわけではない。本来は、それぞれ独立した“地方の伝説”“氏族の説話”などの一部が、大和政権の成立に伴って、あとから組み合わされて作られ、のちに書物としてまとめられたのが『記紀』のストーリーなのである。それは、神話の舞台の多くが実在する地名になっており、架空のものが少ない点にもよく現われている。たとえば、神々が住むとされる高天原は、この世に存在しない空想上の理想の土地の名だが、これなどむしろ例外である。また、昔話にあるような“昔々、あるところに”といった、抽象的表現によって書かれているものも、極めて少ない。神武天皇にせよ、大国主神にせよ、神話上の人物が行ったり活躍したりした場所は、そのほとんどが実際に存在する土地である。そしてそれらの一部は、本来、その伝承が地方神話であったことを示している、と考えられるのである。それを如実に証明するのが、神話の中にたびたび現われる「地名の起源」を説明するエピソードであろう。たとえば神武天皇の東征の話の中に、盾津（大阪府東大阪市）という地名が出てくるが、これは神武天皇がその地で盾を持って立たれたため、そう名づけられたと記されている。また、神武天皇の兄・五瀬命が奈良県生駒の豪族である長髓彦との戦いで負傷したとき、手についた血を洗った海ということで、そのあたりを血沼ちぬの海（大阪湾の古称）と呼ぶようにな

ったと書かれたりしている。そしてこのような地名は、そもそもストーリー全体の流れからすると、それほど重要な要素ではないはずだが、それを一つ一つ丁寧に言及しているのは、これら、神武天皇や五瀬命のエピソード自身、元来は、その土地に伝わる伝承であった可能性を示しているのである。こうした点を考えあわせると、神話全体のストーリーを、そっくりそのまま歴史事実と信ずるわけにはいかないが、一つ一つのエピソードは、後の時代になって、急に創作されたり脚色されたものではなく、古い記憶が反映されている物語だと言ってよい。そして、**これら個々のエピソードには、より古い時代の日本人の感受性や考え方、さらには史実が、象徴的な形ではあるが、ちりばめられているものがある**と見たほうがよい。

#### 「国譲り」の神話が教える出雲の勢力

日本神話の中に登場する地方神話の中で、大和地方を除いて最も多いのは、出雲地方の神話である。その中でも、ひじょうに有名なものは、「国譲り」の伝承である。高天原から日向の高千穂へ神々が降りていくという天孫降臨の話の直前に、このエピソードが語られている。神話によると、天孫降臨をして、日本を神の子孫が統治する前に、まず、地上にいる神々に対して、平和使節ともいべき天孫降臨族の神が地上へと派遣された。地上にいる神々とは、伊邪那岐・伊邪那美の二神によって「大八嶋おおよしまの国」をはじめとする日本列島の国土が創造された直後から存在していたわけだが、時の経過にしたがって、天上の神々を無視した振舞いをするようになった。そのため、天上の神々の直系による直接統治が計画されるようになった。使節として派遣された神というのは武甕槌神たけみかづちのかみと経津主神ふつぬしのかみという二柱の神であった。この神々は、両方とも武力の神様である。彼らは、出雲に降り立って、大己貴神おおなむちのかみに、土地を返すように要求する。大己貴神は、その子の事代主神ことしろぬのかみに相談して、「天の神が降りていらっしやるというのに、どうしてこれに反抗しましょうや」と言って、恭順の意を示したという。これが『日本書紀』の示す「国譲りの神話」のアウトラインである。だがこれは、全体の流れからすると、まことにとってつけた話のような印象を受ける。こんなに簡単に国譲りが終了したのなら、天地開闢という大事件の次を飾るエピソードに、わざわざ挙げるまでのこともないはずである。それを、あえて天孫降臨の前に付け加えたというのには、それ相当の意図が働いていた。そしてそれは、**大和の政権にとって出雲地方の勢力が無視できない大きな存在だったから**であり、**正史の中に「なぜ、大和が出雲に優越した存在か」という理由づけを、どうしても明記しておく必要があったから**である。

#### 出雲と大和は兄弟である

だが、ここで誤解しないでもらいたいのだが、私は「出雲地方の政権が大和政権に征服された」とする説に賛成しているわけではない。というのも、出雲と大和は血を分けた兄弟、つまり両方とも同じ文化圏に属しており、それは出雲から出土する銅器に、大和とは独立した独自の形式を待ったものが存在しないことからわかる。たしかに出雲を含む中国地方からは、多量の遺物が見つかっている。昭和五十九年には、島根県の荒神谷からは三五八本もの銅剣が発掘され、また銅鐸や銅矛も発見されている。出雲地方の豊かな経済力を物語る遺物といえよう。この銅剣の量は、これまで全国各地で発見された銅剣の数より多い。とはいえ、**出雲独自の文化を示す形式のものは何一つ出土しておらず、大和文化の流れを汲むものばかり**である。また言語の点からいっても、出雲と大和は同系なのである。このことから見ても、出雲と大和は文化的に兄弟の関係にあったことが明確である。つまり、この二つの地方の文化的なルーツは同じであり、それが枝分かれして、大和と出雲で強大な勢力に成長した後、兄貴分の大和が弟分の出雲に、「本家はオレなのだから忘れるなよ。だから、祭礼のスタイルにしても、風俗などの文化形態にしても大和の様式を守り、恥ずかしくなトよう振る舞え」というのが、国譲りの神話の真相であろう。だから、そこに他民族に対するような武力的な征服があったとは、とうてい考えられない。平安時代に作られた「延喜式」の中に、天皇の即位の儀式・大嘗祭の時に、出雲の国造が、天皇に述べる祝いの言葉が記されている。「出雲国造の神賀詞かむまぎのことば」というのがそれだが、この慣例も、出雲と大和の友好的な関係を示している。あたかも、お正月に分家の主人が本家へお年始に伺うといった趣であり、「遠くの身内より近くの他人」という諺が示すように、当然、そこには何らかの確執はあったろうが、根底に癒しがたい対立関係が存在したはずはない。

#### 越国こしのくにの神は外国からやって来た

能登の話が出てきたところで、日本海文化圏・「越国」について触れてみたい。出雲神話の中には、越国の名が何度か出てくる。ひとつは、先ほどの「国引き」の話の中に、土地を「高志の都都つの三崎みさき」から引つ張ったという話に登場する。そして八岐大蛇の話でも、『古事記』では「高志こしの八俣やまたの遠呂智おろち」として、大蛇が越国からやってきたことが記されている。このように、越国と出雲は古くから交流があった。しかし、越国の神々は大和や出雲の国の神々とは、多少その発生を異にしたものと考えられる。残念なことに、『記紀』には越国の神話は記されていない（これは、大和政権の神話が作られた当時、まだ越国が大和の勢力圏内に入って間がなかったからとも考えられる）。だから断定はできないが、考古学的な学問成果などから言って、どうやら越国の神々は、外国から渡来した神で、大和の農耕神とは性格が違ったものであったようだ。十世紀に成立した「延喜式」の中に、官立の神社に祀られている神々の名を記した「神名帳」という条文がある。その中で、能登国の神社に祀られている神の名に「美麻奈比古みまなひこ」、「美麻奈比咩みまなひめ」の名が見られ、この名は、朝鮮半島南部にあった任那と関係があると考えられている。つまり、この二

神は朝鮮半島から渡来した神の可能性がある。第2章でも解説したように、古来、能登半島は、地形・風向・海流などの点で日本海文化圏が中国大陸に向けた、文化の触角としての働きをしてきた。だから、能登の人々が半島系の信仰を持っていても何ら不思議ではない。「延喜式」自体は平安時代の史料だが、古代史との間には、せいぜい現代人と織田信長くらい年代距離しかなく、人々の記憶や伝承の中にそれほどの作為が入りこむとは考えにくく、かなり古くからこのような信仰が越の国にはあったと想像される。考古学の立場からも、興味深い遺跡が最近発見された。能登半島の北の海上に、船倉へぐら島という小島がある。その島の遺跡で発見された祭祀の痕跡から牛の骨が出てきた。船倉島は同じく「神名帳」に記載されている奥津比咩おきつひめ神社のあった島だが、この島では牛を神に祀る儀式が行なわれていたのだろう。牛や馬を神に差し出すというのは、道教などの大陸系信仰の習俗で、やはり朝鮮半島からの影響が見られる。朝鮮半島ばかりではなく、中国大陸からの信仰も越国にはあったようである。金沢の近くに白山という山があり、現在では修験道の山として知られている。いまでこそ、修験道は仏教の一派と見なされるようになったが、もともとは山を神聖化する日本固有の山岳信仰で、これが仏教と習合し、日本独自の信仰形態として発展したものである。蛇足ながら、この山岳信仰が仏教と習合したのは、仏教を厚く保護するようになった天皇家の意に副いながら、山岳信仰を広く布教するためであった。要するに山岳信仰というのは、仏教でもなければ神道でもない。そこで考えられるのが、中国大陸の沿海州や朝鮮北部を中心として広がる山岳信仰との関連である。また、白山を開いたと伝えられる奈良時代の僧・泰澄たいちょうが、朝鮮半島からの渡来人を祖先に持つ人物であるという伝説もある。いずれにしても、白山を中心として、日本海側に広がる山岳信仰は、渡来系の影響を受けた確率は、ひじょうに高い。

#### 今より四倍高かった巨大神殿・出雲大社

……出雲、越国と地方の神話を説明してきたが、では、なぜ早い時期から文化的に進んでいた北九州地方の神話が『記紀』にあまり登場しないのかという疑問が、当然、起こることだろう。筑紫地方などは、ここに邪馬台国があったという説もあるほど、実に古くから発達した地域であった。しかし、この地もまた越国がそうであったように、神話の体系が作られた時には、まだ大和政権の支配が及んでいなかったわけで、それが『記紀』に、北九州の神話が登場しない決定的な理由ではないだろうか。さりとて、大和が無視できる存在ではなかったであろう。むしろ、大和政権に対抗するに近いほどの大きな勢力であった。そして、この両者の対立関係は第2章で触れたとおり、磐井の乱があった六世紀初めまで続いていたのである。北九州と大和との関係は、ほかの地方と違って、いつとは明確には断定できないが、磐井の乱以前に、決定的な武力闘争が起こり、大和の勝利という形で終わったと推定されるが、その後遺症は永年にわたって残ったにちがいない。だから、**そのような対立勢力である北九州の地方神話は、大和の神話に組み込み難かった**のであろう。

#### 保守派・物部氏の精神的ルーツとは

**神話の中には地方神話ばかりではなく、それぞれの氏族に伝わる説話も織り込まれている。**つまり、「自分たちの一族の祖先は、どこから来たのか」という疑問に答える形での説話である。まず、欽明天皇の時、仏教の渡来に対して反対を唱え続け、最後には蘇我氏によって滅ぼされた物部氏の説話から話してみたい。神武天皇が東征して大和の向かう途中……。

#### 海幸・山幸の話は、海人あま族の物語だった

海幸彦・山幸彦の話は、神話の中でも今なお有名なエピソードであるが、この話は、その兄の名前が示すとおり、海の民にまつわる伝承を反映したものである（この話は、天孫降臨と神武東征の間に出てくる）……。

#### 隼人舞はやとまいは、海幸彦の溺れる姿

『日本書紀』は、「一書に曰く」として、多くの異説を並記しているが、この海幸・山幸の話にも、いくつかの異伝が記されている。その一つに、面白いことに、この兄・海幸が、後の隼人の先祖であると記されている……。

#### 源頼朝が信仰した海人族の神

……宇佐の神を祀った人々と、宗像族とが同一であったかどうか、現在では確認のしようもないが、ともに海に生きる民であったごとには、まちがいが無い。そして、神話の中に登場することから言っても、早い時斯に大和政権に加わった氏族だと考えられる……。

#### なぜ、宇佐八幡の神託が国運を左右できたか

……伊勢神宮が「神託」を行なうというのなら筋は通るが、もともと大和文化圏には属さなかった「海の民」の神々が、いつの間にか、大和朝廷の危機を左右する「神託」を行なうような権威になってしまった……。封建社会のように社会的なヒエラルキー（身分制度）が確立される以前にあっては、その仲裁役となる上位者が存在しない。そこで長い年月をかけて考案・開発されたのが、社会原理を異にする組織の長に、その判定を仰ぐという知恵である。つまり、こういった争いを内部だけで解決しようとすれば、どうしてもどちらか一方に遺恨を残し、収穫のための共同作業が何かにつけて捗かどらない状況が永らく続く。だが、これと直接利害関係にない集団の原理で裁定するというスタイルを採れば、その決定は客観的で公平な印象が強く、遺恨の残り方も穏やかなものとなり、村社会の秩序は比較的早期に回復してくれる。

さて、神話の章も大詰めを迎えた。残るは天地開闢と国土創造のエピソードに対する解釈である。繰り返すが、**神話は、さまざまなエピソードをひとつのストーリーとして組み込んで作られたものである。だから、話の流れは必ずしもスムーズではないし、つじつまの合わない部分が多いのも事実である。**だが、神話の編纂を試みた人物たちの最も高く評価すべき点は、むしろ、その空白や矛盾を、あえて創作や改変で修正しなかったことにある。しかし、それにもかかわらず、どうしても創作しなければならなかったのは天地開闢、つまり、無から天地が最初に創造された時の物語である。**地方神話や氏族神話を主体とする日本の神話**には、そのような大がかりな話は望むべくもない。それでも、一つの体系として、人間の起源を遡り、さらには天地の起源を遡るときに、この天地開闢の話は無視できない空白であった。そこでヒントとなったのが、中国の天地開闢のストーリーであった。……日本人の……天地開闢という発想が、そもそもなかった……。

#### 絶対神を作らなかった日本人の知恵

……何よりも、太古の日本人の精神がそのまま受け継がれている重大な点は、伊邪那岐命が「この吾あが身の成り余れる処をもちて、汝が身の成り合わざる処に刺し塞ぎて、国土を生み成さんと思う」と宣言する一節にある。すなわち、**不完全な二者が合一することによって、初めて完全体となり、そこから新しい生命が作られる**という考え方である。神ですら、わが国にあっては、単独では完全体とはいえないのである。だから、「いわんや人間においてをや」ということになるのは、言うまでもない。これこそ、絶対的な神を規範とする、キリスト教などと、決定的な相違を示す点である。これらの宗教が支配する世界においては、人間の最終目標とは、完全なる神に一步でも近づくことにはほかならない。これに対し、日本の神々は、最初からみずからの不完全さを認めているのである。だから、神話の神とは、**最高神がその命令を一方的に下すのではなく、八百万の神が合議して決定する**形になっている。『古事記』では、神武天皇の東征の決定も、神武天皇が高千穂にいる神々に相談したうでなされたと書かれている。このような発想は、やはり単独の力では収穫の得られない農耕文化からの古代人なりの結論でもあった。だが、大和政権によって神話が統合される以前にあっては、個と集団の利害を合議制に基づき等価に判断するという行動様式が存在し、この精神はまた、神話の時代から今に連続とつながっているのである。そしてそれは、長い日本人の経験の集約の上立つ“したたかな知恵”の原点ともなっているのである。

#### 現代に甦る“八百万神”の思想

私が、ここでことさらに強調するまでもなく、現代日本社会は、さまざまな価値観が混在する成熟社会であり、その経済力ゆえに、国際社会の中心へと否応なく躍り出ざるをえない状況にある。こういった現実を直視するとき、農耕社会の文化的伝統を根強く持つ日本人が、これから迎える国際化時代に、はたして適性があるのかの問いに関して、悲観的な見解は多い。マサチューセッツ工科大学の利根川進教授が、ノーベル賞受賞に際して、日本で行なった講演の内容を引合いに出すまでもなく、たしかに、“出る杭”を打ち、独創的な研究や考え方が育ちにくい土壤に、日本社会はある。また、山本七平氏が繰り返し指摘されるように、その時代の“空気ムード”に抵抗するような思想や人物を許容しがたい社会通念が、日本社会には厳然として存在し、これが新研究や独創的な考え方にブレーキをかけるのも事実である。そして、国際化時代におけるこれらの日本的アキレス腱は、古来の農耕文化の伝統によって育まれてきたのも事実である。だが、一般の通念に反して、本書を通して私が力説してきたとおり、この農耕的文化の伝統に基づく精神構造が、日本人の最もプリミティブ（原初的）な体験であったわけではない。それ以前に、どんな価値観とも平和に共存する“八百万神が栄えた時代”があったことを忘れてはならない。そして、その八百万神が活躍した時代がどんな社会であったかは、これまで述べたように、『記紀』や『風土記』の「神話」の中に生き生きと活写されているのである。成熟社会というのは、言葉を換えれば、“八百万神が復活する時代”だと言うこともできる。太平洋戦争は、たしかに日本人にとってまことに不幸な出来事であった。だが、その教訓が行きすぎて、日本人の無意識の世界、つまり“日本人らしさの原点”ともいべきメンタリティを培った「神話の世界」を、完全に切り棄てたことは、現代の社会的な状況を勘案するとき、二重の悲劇を惹き起こすことにつながりかねない。だから、この『逆・日本史』シリーズが、日本人のバックボーンを形成したという意味での「神話の復活」に、少しでも寄与することを願ってやまない。いままさに、時代は「神話の時代」へと大きく回帰しており、この悠久とした「歴史の流れ」を、一人でも多くの読者に実感として受け止めてもらいたいのである。実は、このことこそ、日本史を遡るという前代未聞の私の試みを支えつづけてくれた原動力であり、これはまた、歴史を学ぶ者としての、私の“初心”でもあるからである。

<この文書は、「**生駒の神話**」(下記 URL をクリック)に掲載されているものです。>

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>